

渋谷鎮明報告と小島泰雄報告によせて

林 和 生

中国と朝鮮の古地図に関しては、小川琢治を嚆矢に、織田武雄、船越昭生、海野一隆、高橋正など泰斗によるすぐれた研究の蓄積がある。しかし、研究の多くは中国全図や朝鮮全図、あるいは東アジア図など広域図をテキストとするもので、都市図を取り上げた研究は少ない。そのため多様な視座から詳細な分析が行われているわが国の城下町絵図のような都市図そのものに関する研究は皆無に近く、北京や漢城（ソウル）、上海、蘇州あるいは京城都市など特定の都市の形態や内部構造を分析する史料に都市図を活用した研究がほとんどである。それゆえ、それぞれ朝鮮と中国における近代的な都市図の誕生の背景や経緯について考察した渋谷鎮明氏と小島泰雄氏の報告は、東アジアの地図史研究を次の段階に前進させるうえで、非常に有意義な研究成果であると評価できる。

まず渋谷氏の報告は、李朝朝鮮末期から韓国併合前後までの期間に主として民間で多数作成された初期のソウル都市図を取り上げ、それらをおおまかに類型化してそれぞれの特徴をまず指摘された。そして1903年以前には一枚ものの「近代的」ソウル図はなく、日本製の朝鮮半島全図に割図として挿入された簡略なソウル図の多くは、情報不足から朝鮮王朝時代の古地図、特に「大東輿地図」の「都城図」を利用したことを報告された。

さらに一枚ものの近代的なソウル都市図は1903年発行の京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」に始まること、陸軍参謀本部と鉄道会社との密接な関係から朝鮮半島で陸軍が進めて

いた大縮尺地図作成のための1894~1906年の秘密測量の成果がこの地図の作成に用いられた可能性などを指摘された。

渋谷氏の報告に対して、次の二点についてコメントさせていただく。一点目は、テキストとされたソウル図に関して、一枚もののソウル図は1900年以降に、割図として挿入されたソウル図は1884年以降に、いずれも日本人が作成し刊行した地図に限定して論じられた点である。「大東輿地図」の「都城図」や「鰐域地図」の「漢陽京城図」に続くソウル図は朝鮮では作成されなかったのだろうか。朝鮮製のソウル図が存在しない、または未発見であるなら、議論を限定するため日本または日本人が作成したことを表題に加えられるべきだったと思う。

また、渋谷氏は1861年作成の「大東輿地図」や19世紀末作成の「鰐域地図」を古地図とし、それにもとづいた挿図のソウル図を近代都市図とされているが、その間の隔たりはたかだか四半世紀である。議論の前提として古地図と近代図とを明確に線引きする基準を示される必要があったのではないだろうか。さらに「測量図でない『近代都市図』』という表現にもいささか違和感を覚える。

二点目は京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」についてで、渋谷氏はこの地図を「近代化」都市図の嚆矢とし、また陸軍参謀本部との関係を示唆される。1876年の日朝修好条規で日本に朝鮮半島沿岸の測量と海図作成が認められたが、内陸部の測量・作図は認められなかった。が、陸軍参謀本部は1882年に諜報

員を派遣し、また1895年からは臨時測図部が現地調査と測量を開始する。いずれも非合法的な業務であった。「韓国京城全図」には等高線が入り地物も詳細に描かれている点から、臨時測図部による軍用秘図作成の成果が反映されたと考える。京釜鉄道は、渋沢栄一を代表取締役役に、政府・官僚・財界・軍部などとの関係が緊密ないわば国策会社であった。1895～1899年に測量された軍用秘図は、鉄道敷設予定地を100kmの幅で南北に作成されたもので、そこに鉄道の敷設と秘図測量との深い関わりが示唆される。この「韓国京城全図」以降に作成・刊行されたソウル都市図は、この図をもとに作成されたのか、あるいは直接に軍用秘図の情報から作成されたのか、別の測量情報から作成されたのかという問題を、個々の都市図の詳細な検討から究明していただきたいと考える。

次に小島氏の発表は、近代中国の都市図をテキストに都市における近代の受容過程の特徴を「都市化」の観点から論じることを試みた意欲的な報告である。具体的には四川盆地の中心都市である成都を事例に、19世紀後半から20世紀前半にかけて作成された一連の都市図の時代的变化を分析し、そこから都市の近代の特徴について、さらに都市図における近代とは何かということが論じられた。

小島氏は、都市図における近代を、①木版印刷よりも詳細な表現が可能な石版印刷の技術が導入されたこと、②測量と製図において正確性が意識され始めたこと、③都市図が広く一般大衆の利用を意識して作成され販売されたこと、に求めている。さらに、近代都市図への移行を、キーパーソンの活動と結びつけて外から持ち込まれたと報告された。

これら①～③の指摘は非常に興味深いものではあるが、都市図の近代を論じるうえで、果たしてヨーロッパや日本など中国以外の地域においても、これらの指摘が普遍的な妥当性をもっているといえるだろうか。この点に

ついて小島氏のご意見をおうかがいしたい。

次に、キーパーソンに結びつけて都市図の近代が外部から持ち込まれたという論点について、小島氏は事例として、成都最初の近代的都市図を描いた楊維藩が、『大清会典』編纂にともなう『清会典図』作成という国家的事業の中で地図技術を習得し、武漢から四川に來たことを挙げている。この点について、「計里画方」に代表される伝統的な中国の地図技術にヨーロッパの近代的な技術が移植されていく経緯やプロセスについてもさらに究明されることを希望したい。

例えば、地理学への造詣が深い康熙帝の勅命のもと、イエズス会士の指導で行われた「皇輿全覽図」作製事業や、南京条約以降の欧米列強による非合法的な中国国内での測量事業において、中国人を下働きなどに雇用したことが想像されるが、これが近代的な地図技術の中国への移植ルートの一つになったとは考えられないだろうか。また、清朝政府・軍部や各省政府などが設立した各地の「測繪会堂」では、1800人余の技術者が養成されたが、両江測繪会堂や四川陸軍測繪会堂、雲南陸軍測繪会堂では日本人教員を招聘して三角測量、地形図測繪、地図製印などを教授したという。さらに清朝政府は日本などに100人近い留学生を派遣し、測量・製図技術の修得をさせたという。このことも地図技術の移植ルートの一つとは考えられないだろうか。

以上、限られた紙数において、いささかの外れなコメントに終始した感もあるが、渋谷氏、小島氏の貴重な報告を出発点に、例えば江戸期作成の都市図などが長崎や対馬を通して中国と朝鮮の地図作成に何らかの影響をおよぼした可能性はないかなど、東アジアの地図史研究が地域間で相互に比較するという複眼的な視座を持って、さらに発展していくことを期待したい。

(國學院大学文学部)